

16) CAH-PBC mixed type の1例  
—当科経験例と比較して—

尾崎 和幸・五十嵐広隆  
高橋 達・朝倉 均 (新潟大学第三内科)

症例は57歳女性。主訴は、心窩部痛、全身倦怠感、発熱。血液検査上、トランスアミナーゼ、IgG、 $\gamma$ グロブリンの上昇、抗核抗体高値、腹部CTにて肝脾腫を認めたため、当科入院。腹腔鏡検査にて、undulated liver with marked reddish markings, 組織にてCAH-PBC mixed type と診断され、ステロイド投与を開始。トランスアミナーゼ、 $\gamma$ グロブリンの正常化をみた。当科経験三症例の腹腔鏡所見はきわめて類似しており、診断に役立つと考えられた。本疾患は、PBCで認められるような搔痒感、黄疸、コレステロール・アルカリフォスファターゼ上昇などは軽度であり、M2・M4陽性、組織学的にCNSDCと慢性活動性肝炎の両者が認められ、治療はステロイド投与が有効、などの特徴をもっている。

17) 自己免疫性肝炎の経過中に発症した間質性肺炎の1例

塩野 方明・一ノ瀬千恵子  
各務 博・大平 徹郎  
市川 卓郎・寺田 正樹 (新潟市民病院) (呼吸器科)  
原口通比古  
五十嵐健太郎・畑 耕治郎 (同 消化器科)

症例は59歳の男性。平成6年1月、両手の関節痛、全身倦怠感、微熱あり近医受診、肝機能異常を指摘された。肝炎ウイルスマーカーはすべて陰性、腹腔鏡下肝生検で慢性活動性肝炎の所見あり。抗核抗体陽性、血清IgG値の上昇、肝組織所見より自己免疫性肝炎と診断、PSL 30 mgの内服を開始した。10 mgに減量後より発熱あり、両側中肺野に浸潤影を認め、呼吸器科再入院。画像所見、BAL所見等の結果より、間質性肺炎と診断し、methyl-PSLによるパルス療法を行った。一度は症状改善したが、ステロイド減量に伴い再燃し、再度ステロイド大量療法を行い、寛解した。

本症例では、白血球、血小板数の減少、骨破壊を伴わない関節炎、抗核抗体陽性、皮膚症状が認められ、SLEの合併が強く疑われた。SLEの診断基準を満たす何らかの免疫異常状態が背景にあり、自己免疫性肝炎と間質性肺炎の合併が生じたものと思われた。

18) UDCAにて肝組織像の改善がみられたルポイド肝炎の1例

菊地 博・畑 耕治郎  
見田 有作・五十嵐健太郎  
月岡 恵・何 汝朝 (新潟市民病院) (消化器科)  
市井吉三郎

症例は62歳女性。大腿骨頭壊死、変形性脊椎症の既往あり。'92年頃から間歇的な肝機能異常を指摘。経過観察中トランスアミナーゼの上昇傾向が認められ、'94.7.8.当科に入院。入院時トランスアミナーゼは自然に低下していた。ウイルスマーカー陰性、抗核抗体陽性、ガンマグロブリン高値、LE細胞陽性、肝組織像より、ルポイド肝炎と診断した。肝組織は、門脈域への形質細胞を中心とする強い細胞浸潤を認めたが、肝機能異常が一過性であったため、既往歴を考慮してステロイド投与は行わず、UDCA 600 mg/day投与を行った。5ヶ月後の肝生検では炎症細胞が著明に減少していた。一過性型の自己免疫性肝炎に対して、UDCAが有効である事が示唆された。

19) 当院における自己免疫性肝炎症例の検討

五十嵐健太郎・他 (新潟市民病院) (消化器科)

自己免疫性肝炎18例につき検討した。発症年齢は、平均57.3歳、男女比1:3.5であり、中高年の女性に多かった。抗核抗体は100%に陽性、抗平滑筋抗体は86%に陽性であった。他の自己免疫性肝炎の合併率は33%であった。追跡期間は平均4年、最短31日から最長10年2カ月であり、肝機能の推移により、3つの病型への分類を試みた。再燃寛解型としたものは33%で、平均寛解期間は16.6カ月であった。一方、一過性型は56%で、これをさらに急性肝炎型と低値安定型に分けて考えた。この群の一部はステロイド治療を要さなかった。さらに、初診時より1ヶ月前後で死亡した劇症型も存在した。ステロイド投与例は72%であり、ほぼ全例に有効だった。

軽症例の疾患分類および長期予後は今後の課題と考えられた。